

絆を感じ、仲間と共鳴する～合唱祭に学ぶ～

暦の上では冬となり、冬将軍の到来を感じさせるような厳しい寒さの日があり、また小春日和のような暖かい日もあり、冬将軍と暖気が入れ代わり立ち代わりの状態が続いているようです。先週は学校でも教室のストーブの試運転を行うなど冬への備えも進めています。先週はインフルエンザまん延防止のために学年閉鎖や学級閉鎖の措置をとらせていただきました。それに伴い、連絡させていただいたように、1, 2年生の期末テストについても日程を変更して実施をします。ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

11月17日(金)に「合唱祭」を行いました。コロナの影響もあり、敷島中の伝統ある合唱祭が開催されるのは5年ぶりでした。しかし、インフルエンザのまん延もあり、残念ながら1年2組、1年3組は、学級閉鎖で参加することはできませんでした。1年2組、3組の生徒については、リモートで合唱祭を見られるように準備をしました。また、他の学年、学級でもインフルエンザ等で参加できない生徒もおり、ステージに立てない生徒がでてしまったことはとても残念でした。しかし、参加できない仲間の分まで、精一杯の歌声を会場に響かせてくれました。

私は、合唱をつくりあげるためには、いくつかの壁をのりこえなければならぬと思っています。のりこえた壁の先には感動があります。どの学級、学年もこれまでの練習の成果を發揮し聴かせてくれました。インフルエンザの学級閉鎖のため3クラスで頑張った1年生、3クラスであることを感じさせないほどの迫力ある演奏でした。非常にレベルの高い素晴らしい合唱を披露してくれた2年生、どのクラスの発表も年輪祭の頃よりも大きな成長を感じました。最初で最後の合唱祭にかける想いを演奏にのせ、感動的な発表をしてくれた3年生。圧巻の演奏を、私たちに聴かせてくれました。3年生の合唱は、かけがえのない素晴らしい宝物を1, 2年生や私たちに残してくれました。本当に素晴らしい合唱祭となりました。確かな学級、学年の絆と大きな成長を見ることができました。

みんなで歌う合唱

みんなで歌うから みんなが主役

みんなで一丸となって 互いの力を信じて歌う

全員が信じ合うことで はじめて合唱は心に響く

仲間と何かを成し遂げて 初めて味わえる感動 そして達成感

この体験ができることはなかなかない

合唱は敷島中生に大切なことを教えてくれた



絆を感じ、仲間と共鳴する。人はチームの中でこそ、向上し成長していく。このことを忘れず、これからも様々なことに挑戦して行ってほしいと思います。保護者の皆様方には、多数ご来校いただき、誠にありがとうございました。会場の都合で、学年ごとに入替をさせていただきながら、参観していただきました。合唱祭後のさくら連絡網でのたくさんの温かい言葉や励ましの言葉、本当にありがとうございました。

<生徒の感想>

私たち1年生の学年合唱では何回もパート練習を重ね、パートごとの音取りを徹底的にやってきました。そして合わせでは学年生徒会が中心となり、練習をするごとに目標を立て、その振り返りを行ってきました。田中先生や学年の先生方にも教えていただき、たくさん改善していきました。そして本番では学級閉鎖になってしまったクラスもあり、全員で歌うことはできませんでしたが、ここにいる仲間と今出し切れる全力で、強弱や伸ばすところを意識して歌うことができました。(1年1組 中村 栞さん)

私は合唱祭を通して、敷中の活気や本気、そして音楽の素晴らしさを改めて感じました。私のクラスは、合唱を良くしたい、という気持ちが強いゆえに、ぶつかり合うことが多くありました。そのたびに学級会長やパートリーダーを中心に声かけをしたり、たくさん話し合いを重ねたりすることで乗り越え、みんなでここまでやってくることができました。私は学年合唱、クラス合唱のソロを担当し、無事に成功させることができました。それは、教えて下さった先生方や、アドバイスをくれたり見守ってくれたりする仲間たちがいてくれたからだと思います。来年は最高学年になります。ここまで頑張ってきたことを生かして、すべてのことに全力で、一生懸命に頑張っていきたいと思います。(2年5組 池谷心音さん)

私たち3年生は最高学年として今日まで一人一人が真剣に練習に励んできました。学年合唱では田中先生に聴いている人に歌を届けるためにどんな風に歌うのか教えていただきました。先日行われた芸術鑑賞会ではハルモニア・アンサンブルのみなさんと合唱させていただき、とても良い刺激になりました。3年生の合唱は、一人一人が最高学年として気持ちを込めて歌うことができたと思います。合唱祭を通して、どの学年もどのクラスも団結力を深めることができたのではないのでしょうか。そして、敷島中の歴史ある伝統を引き継ぎ、次につなげられるような素晴らしい合唱をつくりあげることができたと思います。(3年2組 大久保嬉音さん)

朝早く学校に来て練習したり、仲間と教えあったりする様子が見られ、ひとりひとりが合唱に取り組む姿、思いが各学年やクラスから伝わってきました。特に、私たち3年生は卒業式前の最後の大きな行事なので、絶対に成功させたい、思い出に残る最高の合唱にしたいという思いがありました。合唱祭はコンクールと違い、勝ち負けがありません。最高の合唱をつくりたいという思いが強くなり、今日の思いのこもった合唱に繋がったと思います。今日の合唱や、今までの練習に培った成果など、これからの学校生活に活かしていきたいと思います。(3年4組 山口那南さん)

子育て談話室②～比較を絶つ～

久しぶりのこのコーナーです。現代社会は、情報があふれて、何が正しくて、何が価値あることなのか、ということが不易なのかなど、とてもわかりにくい時代となっています。この難しい時代に、“子育て”という一大事業を行っている保護者の皆様方に、私なりに大切にしたいほうがいいと考える『子育てのポイント』を提案させていただくのが、このシリーズです。お子さんと一緒にご一読いただければと思います。

今回は、大人も子どもも大切にするべき心のあり方について述べたいと思います。ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)で日本代表チームを優勝に導いた栗山英樹前監督の執筆された本の中で、哲学者・教育者である森信三さんの「比較を絶つ」という言葉が紹介されていました。

どうしても人は、自分にできないことができる人や自分が持っていないものを持っている人と自らを比較して、悩んだりつらい思いをしたりすることがあります。その「比較」とらわれた考え方から脱却し、もっと自らに目を向け、自らの使命を貫くべきだという意味の言葉でしょう。

私なりにその解釈を深く掘り下げれば、「比較」の全てがマイナスになるというわけではなく、「比較」によって「否定的解釈」をすることが問題なのではないかと思います。「隣の芝は青く見える」という言葉もあるように、嫉妬心や無いものねだりの感情から、他人に攻撃的になったり、自暴自棄になったりすることは、幸せにも成長にもつながりません。そのような比較の「否定的解釈」は絶つべきです。

ただ、比較の「肯定的解釈」は大きなプラスの効果を生みます。受験においても、仲間の存在を肯定的に解釈できれば、大きなモチベーションにつながり、成長の原動力になります。自分より頑張っている友達は、自らを俯瞰(ふかん)するきっかけを与えてくれる存在であり、その比較があるからこそ、さらに頑張ろうと思えるわけです。憧れの存在、ロールモデルの存在との比較の中で、自分もそうなりたい、少しでもその存在に近づきたいという目標を得て、自らを成長に導くことができます。

つまり、自分以外の存在を、自らの成長にとってありがたい人々であるとみる考えがあれば、それに基づいて行われる比較は「肯定的解釈」となり、成長に不可欠なものになるのではないのでしょうか。

子どもたちにはぜひ、自分の周りにいる人々、身の周りで起こることをできる限り肯定的に解釈して、全て自身のプラスにしていく生き方を身に付けてほしいと思っています。(著：黒田耕平)